

The Ancient Maya Cosmos as Viewed from Stone Sculptures and Architectural Patterns: A Perspective from the Late Preclassic Period Southern Maya Lowlands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35766

建造物の石彫と構造に見られる古代マヤ人の世界観 ～先古典期後期のマヤ低地南部を例にして～

金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程2年

多々良 穰

要旨

マヤ低地南部に位置する都市では、すでに先古典期後期には巨大な建造物が造られていた。古代マヤの宗教や世界観を知る材料は豊富ではないが、それらの建造物に装飾された石彫、建造物の配置、神話などから彼らの思想体系を知ることができる。

先古典期後期に築造されたナクベ、エル・ミラドル、セロス、ワシャクトゥンでは、神殿基壇に中央階段が造られ、その両端には石彫マスクが飾られていた。先行研究によると、それらはジャガー神を表現したと考えられ、天体の運行と関連した彫刻も見られるとされている。ジャガーはオルメカ以来重要な神とされ、先古典期後期におけるマヤ低地南部でも多く認められることから、崇拝の対象となっていたという。また、エル・ミラドルやセロスの神殿の石彫は、太陽や金星の運行を暗喩したと解釈されている。さらに建造物に装飾された石彫の一部は、マヤ高地に住んでいたキチェ人が残した『ポボル・ウフ』との関連もうかがわれる。

特定の数字が、マヤの世界観を表した石彫や建造物に反映されていたと考えられる事例も指摘できる。主要な建造物と他の2つの建造物で構成される「3つ組」と呼ばれる配置パターンは、家の中心と世界そのものを象徴している。4は方角や神々が支えている世界の四隅を表すほか、太陽神信仰とも関係があるかもしれない。また古代マヤ人は、世界が天界・地上界・地下界に分かれていると信じていたが、9は地下界の層数を、13は天界の層数をそれぞれ表している。すでに先古典期後期において、神殿の石彫や構造に特定の数字を取り込むことで、王やエリート層は権威を高めようとしていたと考えられる。

キーワード

古代マヤ、石彫、建造物、世界観

The Ancient Maya Cosmos as Viewed from Stone Sculptures and Architectural Patterns : A Perspective from the Late Preclassic Period Southern Maya Lowlands

TATARA Yutaka

Abstract

During the Late Preclassic period, there was massive construction in cities throughout the southern Maya lowlands. Through studying their layout and associated stone sculptures, it is possible to examine hypotheses related to ancient Maya cosmology and religion.

One common architectural motif consists of great stucco masks flanking the central staircase of important ceremonial structures. While it is unwise to assume that the masks had the same significance in each site, they tend to be representations of the Jaguar God of the Underworld. These representations are associated with the movement of celestial bodies such as the sun and Venus. Other examples of Late Preclassic artwork appear to be related to earlier versions of the “Popol Vuh”.

Certain numbers reflected in the sculpture and architecture at these cities are also tied to important aspects of Maya cosmology. A “triadic” layout consisting of one principal structure flanked by two smaller ones creates a symbolic three-stone hearth, which symbolizes the center of the home and the universe itself. The typical plaza group consists of four structures organized in a square or rectangle, with each structure standing in for the four cardinal directions. 9 and 13 are also common, the former relating the works to the 9 layers of the underworld and the latter to the 13 layers of the heavens. It is argued in this paper that rulers used these mythological and cosmological associations to enhance their authority.

Keywords

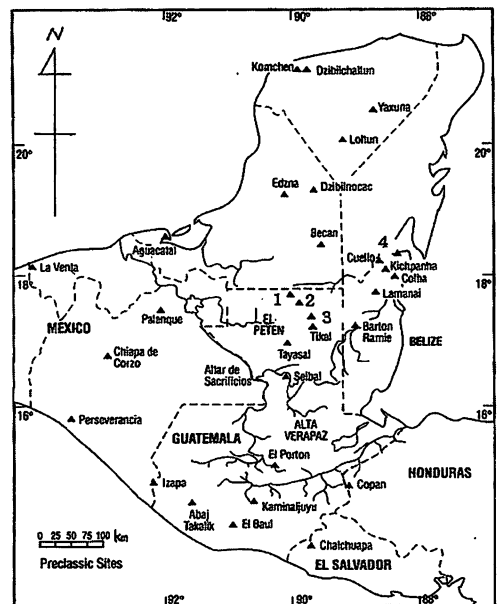
The ancient Maya, Stone Sculptures, Architecture, Cosmology

1. はじめに

古代マヤの宗教は多神教であり、彼らの生活に深く浸透していた。特に自然対象物を神として信仰しており、天体をはじめ、気候に関連する事物、動植物など、非常に多くの神々が知られている。現代のわれわれにとって、当時の神々や思想・世界観を知る材料は豊富とは言えない。しかし、土器や壁画・絵文書などに描かれた図像、建造物に装飾された石彫、建造物の構造や配置、そして神話を通じて、彼らが何を信仰しどのような世界観を持っていたのかを推測することができる。特に、マヤ遺跡を訪れるとよく目にするのが、神殿と思われる建造物の外壁やピラミッドの階段などに認められるマスクや、複雑な文様を伴った石彫である。このような石彫は、大型のピラミッドとともに、都市の勃興期にあたる先古典期後期にはマヤ低地南部ですでに作られていた。建造物に装飾されたマスクは、古典期にも引き続き制作され、漆喰彫刻だけではなく、モザイク石彫も多く作られるようになる。

また、神殿のレイアウトや階段の数には、特定

の数字を意識したと見られるものがある。石彫のモチーフも含め、特定の数字は、マヤ叙事詩『ポポル・ウフ』との関連も認められる。本論では、先古典期後期におけるマヤ低地の代表的な遺跡で



1 : エル・ミラドル 2 : ナクベ 3 : ワシャクトゥン
4 : セロス

図1 マヤ遺跡

あるナクベ（グアテマラ）、エル・ミラドール（グアテマラ）、セロス（ベリーズ）、ワシャクトゥン（グアテマラ）を取りあげ、どのような思想や世界観が先古典期後期の古代マヤ人にあったのか考察したい。

2. 先古典期後期の石彫マスク

本章では、先古典期後期に属する遺跡に建てられた建造物において、石彫マスクが何を表現したものかを、先行研究を整理しながら見ていきたい。

(1) ナクベ

先古典期中期からすでに神殿が建てられていたナクベでは、先古典期後期前半にも高さ32m～45mに及ぶ神殿ピラミッドが3つ建設され、都市が完成した。それら3つの神殿が乗っている基壇（建造物1）の外壁には、神々の顔を多彩色で表現したマヤ文明最大の漆喰彫刻がある（図2）。このマスクは、くちばしの形をした口や鉤爪がついた文様があることなどから、鳥をモチーフにした神もしくは怪物を表現したものと考えられる。コウは、キチュ・マヤに伝わっていた『ポボル・ウフ』に登場する鳥の主神ウクブ・カキシユが表現されたものだとして指摘している（Coe 2011: 82）。また、この漆喰彫刻がある神殿の階段は13段であり、マヤにおいて天界の層数とされる13と一致することは、単なる偶然ではないであろう。なお、この石彫マスクを含め、ナクベでは少なくとも9つのマスクが発見されているという（Hansen 1991）。

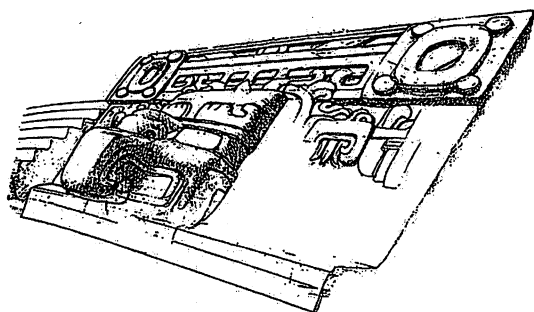


図2 ナクベの神殿にある漆喰彫刻（Coe 2011: fig.33）

(2) エル・ミラドール

この遺跡は先古典期後期の最大の都市で非常に広く、現在大規模な調査が続けられているが、まだ全容は解明されていない。ダンタピラミッドは高さ72m、ティグレピラミッドは高さ55m、モノスピラミッドは高さ48mを誇り、その規模は古典期の代表的な都市を上回っている。

東グループに属するダンタピラミッドの第1基壇には、中央の階段を挟んで左右にマスクの漆喰彫刻が見られる。続く第2基壇の上に、急勾配の3層で構成される第3基壇が建てられている。やはりその中央階段の左右には1層に1つずつ、つまり左右に3つずつマスクの彫刻が施されている。さらにその第3基壇の上に、主神殿であるダンタピラミッドがある。この主神殿にも、第1・第3基壇ほどではないが、小さめのマスク彫刻が階段の両端の基部に作られている。マスクは風化しており、正確な図像分析ができない。

第1基壇上の南西角に近いラ・パバのピラミッドも、基壇の上に3つの神殿が建てられた。そのうち建造物2A6-6の階段は9段である。またトレンチからはJ型と推測される巻文がある漆喰マスクが発見されたが、遺存が悪く図像分析は不可能である（Howell 1989: Fig.11）。

ティグレピラミッドは、西グループに位置する。その一角の大アクロポリスには水路があり、その水路に沿った壁に『ポボル・ウフ』の双子の兄弟を表現したと考えられる漆喰彫刻がある。詳しくは後述したい。建造物313は左右に脇神殿を伴う3神殿形式で、3層の建造物になっている。

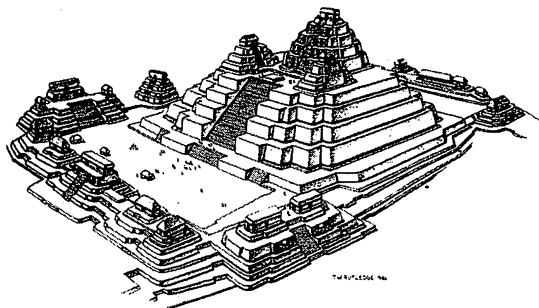


図3 ティグレピラミッド（Hansen 1990: preface）

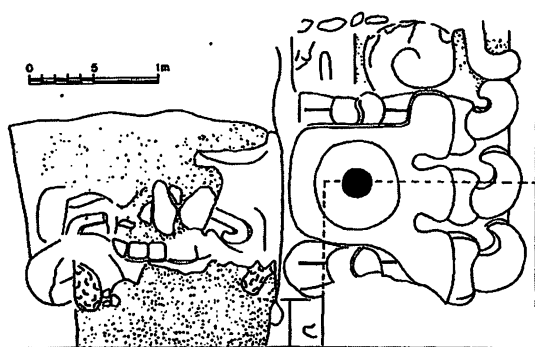


図4 東のマスク (Hansen 1990: Fig.31)

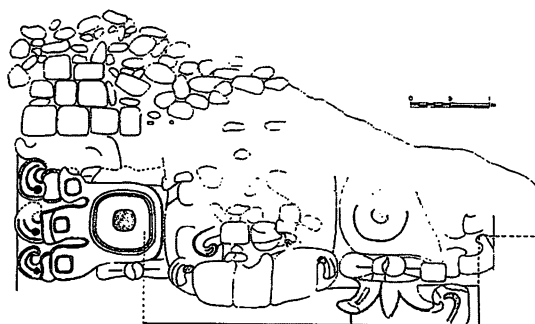
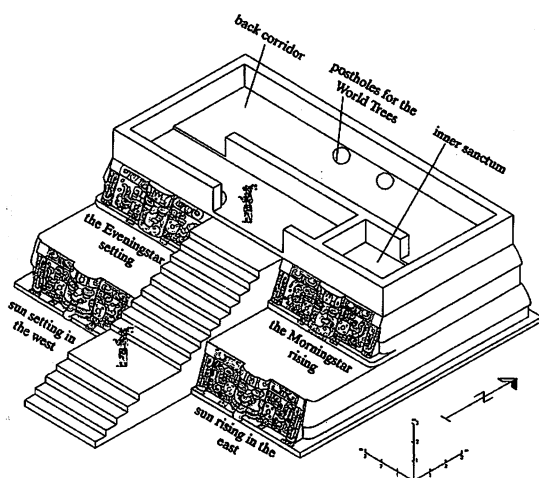


図5 西のマスク (Hansen 1990: Fig.38)

第2基壇の階段の両側には、マスクが認められる。ティグレピラミッドの基壇にある神殿34は、「ジャガーの鉤爪の神殿」と呼ばれている。階段の両側にマスクがあり、耳飾りの外側には名称通りに鉤爪の彫刻がある。神殿は北向きに立っているので、階段左が東側、階段右が西側になる。東のマスクは下顎があって骸骨のような表情に見える(図4)、西のマスクは牙が突き出ていると活力がある表情に見える(図5)という。つまり、東は「死」、西は「生」という二元性を表しているというのである(Hansen 1990: 164-166)。しかし、この説には矛盾点が指摘できるので、このことも後述する。主神殿は4層になった第3基壇の上に建てられ(図3)、階段の両端にあるマスクもそれぞれ4つ装飾されている。

また、モノスピラミッドからも階段の横からマスクが発見されたが、漆喰は認められず、図像分析に足る情報が得られていない(Copeland 1989: 25-26)。

図6 セロスの建造物5C
(Schele and Friedel 1990: FIG.3:6)

(3) セロス

先古典期後期から古典期前期初頭の遺跡で、海辺に面した立地から交易の要衝として栄えた都市である。初期の神殿である建造物5Cには、大きな漆喰彫刻のマスクが階段を挟んでそれぞれ上段と下段に彫られている。

シーリーとフリーデルによると、建造物5Cには方位を意識した建築プランが見られるという。正面はちょうど南に向いており、階段を北側に上がると神殿の上にある部屋に向かうことになる(図6)。北側が上、南側が下とすると、この世である大地からあの世である天界へと、王が儀式を行うために登ることになるという(Schele and Friedel 1990: 105)。

さて、4つのマスクについて、シーリーとフリーデルは次のように説明している。下段の右側のマスクは昇る太陽を、下段の左側のマスクは沈む太陽を表わしているとしているという。それは、マスクの頬にある花卉のようなマークが、太陽を意味するキンという文字だからである(図7)。この4枚の花卉は、古典期全体で太陽神によく見られる特徴である。さらに、初めを意味するヤシュもマスクの左側に認められる。したがって、右下のマスクは神殿の東側にあることも合わせ、昇る太陽を表していることになる。それに対

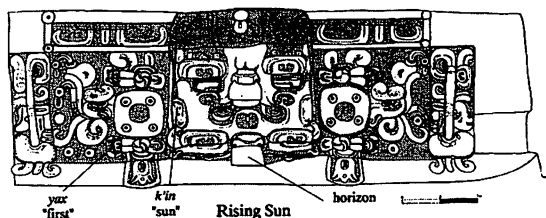


図7 セロスの建造物5C第2層の右下のマスク
(Schele and Friedel 1990: FIG.3:12)

し、左下のマスクにはヤシュという文字が見当たらず、方角的にも西に位置するため沈む太陽を表しているという。したがって、右下のマスクは牙をあることや鉤爪があることから「ジャガー」と「太陽」を合わせて表現した「ジャガー太陽」だとしている (Ibid. 113)。

なお、マスクについている耳飾りは、建造物6Bや建造物29Bのマスクと同様に四角い角の丸まった形であり (図7)、この種の耳飾りが流行したことがうかがえる。

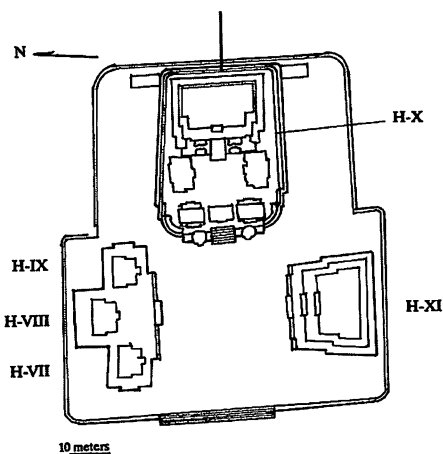
建造物5Cから南に位置する建造物29Cは、西側を正面とした2段の基壇であり、同様に13段の階段がついている。そして階段を登り詰めると、さらにその面を基壇とし、西向きの中央の神殿とそれを南北から挟むように向かい合った小さな建造物がある。中央の神殿の階段を挟むように両端にパネルがあり、やはり口から渦巻き文が出てい

るジャガーの頭が装飾されている。シーリーとフリーデルの分析によると、血をイメージした渦巻き文は、『ポ波尔・ウフ』で犠牲となって死に、シバルバーの主を打ち負かす手段として再生したファンアプを表現しているという (Ibid. 124)。

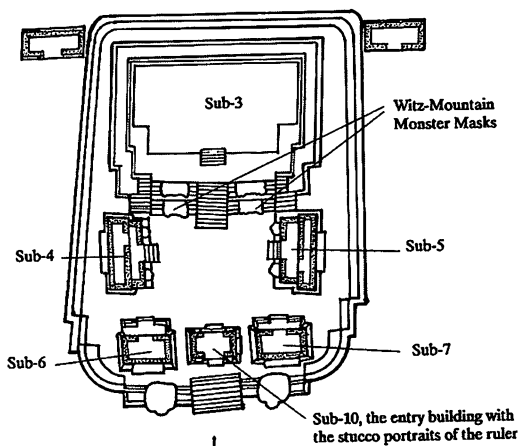
(4) ワシャクトウン

グアテマラのペテン地域に位置し、先古典期中期から古典期終末期まで居住された都市である。グループHでは、先古典期後期に神殿ピラミッド群が建てられた。エル・ミラドル同様に、3組の建造物を配置した基壇が見られる (図8a)。3つの基壇の上には、それぞれ小さなアクロポリスが設けられている。そのうち東側に位置する一番大きな建造物H-10 (H-X) には、図8bでいうと左から順にH-10下層6 (sub-6)、下層10 (sub-10)、そして下層7 (sub-7) が建てられている。基壇にしてもアクロポリスにしても、一番大きな建造物、つまり建造物H-10 (H-X) やH-10下層3 (sub-3) がもっとも東側に配置されているのがわかる。このことから、太陽が昇る方向に主要な神殿が建てられた可能性もあるだろう。

建造物H-10の上には、6つの神殿が建てられている (図8b)。建造物H-10下層4と下層5は南北を軸にして向かい合っているが、それぞれジャガーのマスクが階段を挟んで両端のパネルに刻ま



a Hグループ



b 建造物H-10

図8 ワシャクトウンの建造物H (Schele and Friedel 1990: FIG.4:6)

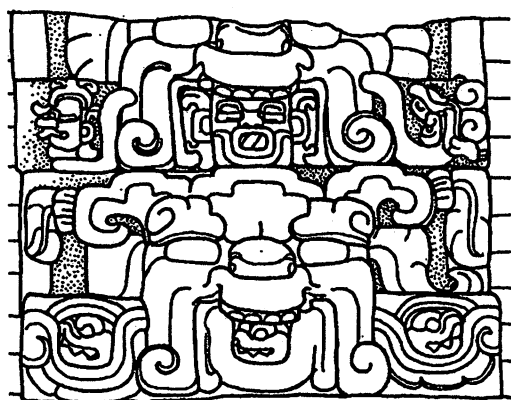


図9 ワシャクトゥンの建造物H-10下層3のマスク
(Friedel 1993: FIG.3:9)

れている。また、建造物H-10 下層3にも、大きなマスクのあるパネルが中央の階段を挟んで左右に上下2つずつある（図9）。シーリーによると、下段のパネルに彫られた漆喰のマスクは山を表す「ウィッツ」であり、水の渦巻きの中で魚が泳いでいる様子が表現されているという（Schele 1998: 495）。

一方、上段のパネルに彫られたマスクには、さらに口の中にも小さなマスクが見られる（図9）。ラ・ベンタの石彫には洞窟からある人物が出現している様子が描かれており、それと同じように大きなマスクを洞窟に見立てて小さなマスクが出現している様子を表現したと、筆者は考える。また、シーリーとフリーデルによると、両端に「幻視のヘビ」が現れ、頭を左右に貫いているという。「幻視のヘビ」は聖なる世界と人間の世界とで交感する儀式の際に現れることが多く、現世と来世をつなぐ通路の象徴であり、この図は王が神殿の

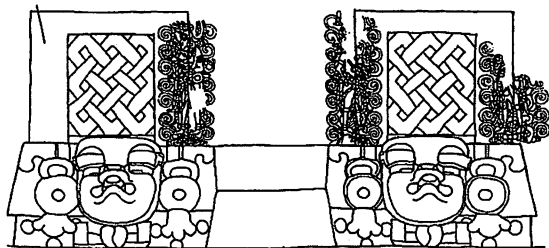


図10 建造物H-10下層10のマスク
(Friedel 1993: FIG.3:13)

階段を登って儀礼を指揮し、あの世と交信する道を具現化しているとされている（Schele and Friedel 1990: 138-139）。

建造物H-10下層10（図8b）は、東西軸に沿ってアクロポリスへ階段を使って登っていく正面に位置している。その階段の両端に装飾された鼻が上向きに丸くなっている漆喰のマスクは、その前足の形状からもジャガーを示すものであろう（図10）。このマスクの主は、上のマット模様を下から支えているように見えるが、それは世界の4つの隅に立ち、大地を支えているパウアトゥンを表現しているという（Friedel 1993: 142）。マット模様は、王権を表す主要な象徴の1つである。マットはマヤ語でポップ（pop）と言うことから、このマットはポボルの会議室、すなわちポボル・ナ（評議の家）と認識できる。

フリーデルによると、マット文様のあるポボル・ナでは、王が人々と交流しながら、聖なる踊りを教えていた。あの世に旅立つ人々が、この世に力と正当性を与える超自然的な生き物に挨拶するために、このような踊りをする。側柱に刻まれた人物はワシャクトゥンの創始者を意味し、ポボル・ナの建造物に入っていくときに、祖先の神として認識される歴代の王に挟まれて登っていくことになるという（Ibid. 143）。入口の側柱にある図像が王である理由は、頭のかぶり物とベルトの凝った装飾や、マットの敷かれた王座に立っていること、体を取り巻く血あるいは煙の渦巻きがあることである（Schele and Friedel 1990: 139）。この渦巻きは、すべての生命に宿る魂あるいは聖なるものを意味するチュレル（ch'ulel）を表しているとされる（Friedel 1993: 142）。

一方、グループEも先古典期後期に建造された神殿が存在した。古典期前期に造られた建造物に覆われる形で下から発見されたため、先古典期後期の神殿を建造物E-7下層と称している。その建造物E-7下層には、多くのマスクが装飾されている（Ricketson and Ricketson 1937）。階段を挟んで両側に上段と下段には、それぞれ1つずつマスクが配置されている。これが4方向とも同じよ

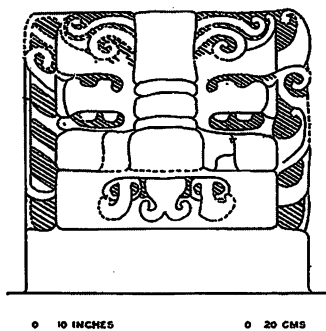


図11 建造物E-7下層の東側2段目のマスク
(Ricketson and Ricketson 1937: FIG.44)

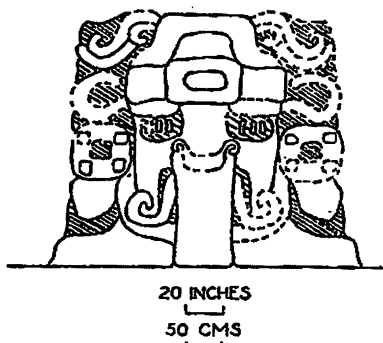


図12 建造物E-7下層の東側3段目のマスク
(Ricketson and Ricketson 1937: FIG.49)

うに配置され、さらにその上の3段目には、マスクが東面に2つ配置されている。つまり、建造物E-7下層には、合計18個のマスクが装飾されている。

筆者は、3段目のマスク2つが東側のみに造られていたことから、正面は東側だと考える。正面から見ると、太陽が神殿の後ろから昇ってくることになり、これはセロスやワシャクトゥンのHグループと同様の建築パターンである。それぞれのマスクは、細かい部分で若干異なるところもあるが、概ね同じものを表現したと考えてよいだろう。いずれも牙が誇張されており、ジャガーを示しているのは明白である。だが、同時に口の中からはヘビを表す舌が出ており、ジャガーとヘビが融合したものと見ることもできる(図11)。

また、建造物E-7下層の三段目に位置する2つのマスクは、同様に牙が誇張されているが、他の

マスクと違うのは、ヘビの舌が表現されていないことと、耳飾りに花のような文様がついていることである(図12)。この耳飾りについては、第4章で後述したい。

3. 石彫や壁画に見られる『ポボル・ウフ』の描写

古代マヤ人の世界観の手がかりは、目に見える形で残されていることが非常に限られており、マヤ人自身による文書史料、植民地時代初期のスペイン人による文書史料、考古学的図像、そして現代民族誌などが貴重な情報源である(多々良2002)。このうち本章では、『ポボル・ウフ』(Recinos 1952)との関連を取りあげる。『ポボル・ウフ』は、マヤ高地に伝承された内容をキチェ・マヤ人が叙事詩にしたものである。ドミニコ会士のヒメネスが、当時キチェ語をアルファベットによって書かれたものを発見し、その原文を写してスペイン語訳をつけたという(1701~03)。その写本は残っているものの、原文の行方は分かっていない。『ポボル・ウフ』は、原初の世界の創造、双子の英雄の活躍、人類やトウモロコシの起源、そして王の事蹟を中心としたキチェ人の歴史伝承というテーマで構成されている。

『ポボル・ウフ』はスペイン人征服後の16世紀に書かれたものと推測されている(Miller 1999; 2001, Miller and Taube 1993; Sharer and Traxler 2006 他)。ここに書かれているものは、当時の高地に住んでいたキチェ・マヤ人に伝わっていた神話や世界観を知る一級品の手掛かりとなる。しかし、その内容は16世紀以降のキチェ・マヤ人だけに限定されるものではなく、スペイン人征服以前の後古典期のマヤ高地はもちろんのこと、古典期のマヤ低地にも同様の神話や世界観が広がっていたことを、多くの研究者が支持している(Coe 2011, Miller 1999; 2001, Schele and Friedel 1991, Sharer and Traxler 2006 他)。

例えば、古典期のマヤ低地で発見された皿には、亀の甲羅である大地が割れ、そこからトウモ

ロコシの神が現れ、その両端に双子の英雄がいる場面が描かれている (Coe 1973)。これは、『ポボル・ウフ』に登場する双子の兄弟や天地創造の場面だと考えられている (Coe 1989; 2011)。また、怪鳥ウクブ・カキシシュをモチーフにした土器の蓋や絵も認められる (Miller and Taube 1993, 猪股・中村・馬場 2003)。ナフ・トニッチ洞窟で発見された壁画87には、ジャガーの毛皮を着た男と向かい合って座っている男が描かれている。ジャガーの毛皮は狩りを象徴しており、やはり『ポボル・ウフ』に登場する双子の一人フンアフブだと考えられている (Stone 1995: 149)。また、フンアフブは吹筒によってウクブ・カキシシュを退治したが、その場面を彷彿とさせるのが壁画21である。斑点のある服はジャガーの毛皮で、小さなつばのある帽子は吹き矢を持つ狩人を意味するという (Coe 1989: 171)。さらに、前100年ころ (先古典期後期) に相当するサン・バルトロでも、サターノらは、ピントウラス下層1号神殿の西壁南側にある壁画において、図像1・3・5・7に描かれている放血儀礼をする男性が、双子の英雄の4つの側面を表現していると考えている。特に図像5は、『ポボル・ウフ』の中でフンアフブが狩猟している場面を、左から4番目の木は、『ポボル・ウフ』に出てくる生命樹で、ウクブ・カキシシュが止まっている場面をそれぞれ描写していると指摘している (Saturno et al. 2004: 9)。

古典期前期初頭に相当するイサバ遺跡では、石碑2に双子がウクブ・カキシシュを退治する場面が、石碑25では腕をもぎとられたフンアフブが描かれている (Norman 1973; 1976, Pool 2007)。

以上のように、多くの遺物が『ポボル・ウフ』との関連を示唆している。本論で扱ったエル・ミラドールのティグレピラミッドにおいて、大アクロポリスの水路の近くにある建造物には漆喰彫刻が見られる。そこには、双子の兄弟が首を背中に括りつけて地下界から出てくるシーンが彫られている (図13)。『ポボル・ウフ』には、フンアフブとイシュバランケの双子の兄弟が地下界に赴き、神々を滅ぼしてフン・フンアフブの敵を討つ場面



図13 エル・ミラドールの漆喰彫刻 (大木邦夫 撮影)

がある。おそらくこの彫刻の首は、地下界で勝利して双子の兄弟が父親 (フン・フンアフブ) の首を持って帰った以下のシーンだと解釈できる。

「(前略) いよいよおまえたちを殺してやる。おまえたちを供犠にしてやるのだ」とフン・カメーとウクブ・カメーが言った。そして早速、2人を供犠にし (中略)、この兄弟を埋める前に、フン・フンアフブの首だけを切り落として、「この首を持って行って、道端に植えてあるあの木に吊るしておけ」とフン・カメーとウクブ・カメーが言った。ところがこの首が木に吊るされると、それまでは一度も実らなかったこの木が、たちまち実で一杯になってしまったのである。それで今でもこのヒカロの木の実をフン・フンアフブの首と呼んでいる。(中略) フンアフブとイシュバランケは、吹筒を担いで、シバルバーへ向かって道を下って行った。(中略) フン・カメーを殺すと、2人はウクブ・カメーをやっつけた。(中略) 彼らの父親たちであるが、若者たちはシバルバーでこの2人の顔を見ることができた。(Recinos 1952: 56-57, 79, 98, 101)

また、ワシャクトウンの建造物H-10下層3のマスク (図9) に相当する『ポボル・ウフ』の場面は、大地が神によって創られた箇所だと考えられる。フリーデルは、ここに見られるマスクは「山の怪物」であり、天地が創造されたときに原初的

な海の中から出現した「最初の真の山」を表していると解釈している (Friedel 1993: 139)。そして、前述したように、ナクベの神殿に刻まれたマスク (図2) にも、鳥神ウクブ・カキシユが表現されているという (Coe 2011: 82)。

以上見てきた石彫のモチーフから、『ポボル・ウフ』に記されている神話は、すでに先古典期後期に存在していた可能性が高いことが指摘できよう。先古典期後期から古典期前期、そして古典期後期とつながっている図像やデザインの事例は、土器など石彫以外の資料でも認められている (Coe 1973; 1976)。単純な直接的歴史類推法 (Direct Historical Approach) による断定は避けなければならないが、『ポボル・ウフ』に見られる神話や世界観は、地域的にはマヤ高地だけでなく低地まで、時代的には先古典期後期から後古典期まで連続して伝わっていた可能性が高いと思われる。

4. 石彫マスクや建造物から見た世界観

まず、建造物に装飾されている石彫マスクそのものから考察する。ナクベの神殿には、マスクの両斜め上に角の丸い四角い模様が見られる (図2)。これと同様の耳飾りが、エル・ミラドールの建造物313のマスク (図4・図5)、セロスの建造物5C第2層のマスク (図7)、ワシャクトゥンの建造物H-10下層10のマスク (図10) や建造物E-7下層のマスク (図12) に見られるのである。太陽を表すマークも4つの花卉が表現されている場合が多く (図7)、このような花に類似した構造の耳飾りは太陽を象徴するものだと推測できる。もしそうであれば、ナクベのウクブ・カキシユを表現したマスクに太陽と同一視する耳飾りをつけることで、神殿を登ることを天界に近づく行為として象徴化しようとしたと考えるのは、飛躍しすぎの論理であろうか。ただ、この仮説の是非はともかく、天空を聖なる場所として意識したマヤ人が、空に生息する鳥を神格化し、聖所と考えたピラミッドのような高い場所に神話的な鳥を彫刻して

天空と重ね合わせたと、他の研究者も推測している (Coe 2011: 82)。

一方、耳飾りにについている花のような模様は何を意味するのであろうか。花は、儀式において神に捧げる供物を表すことが知られている (Miller and Taube 1993: 88-89)。ワシャクトゥンのマスクには耳飾りのあるものとないものがあるが、建造物E-7下層のもっとも高い所にあるマスクは耳飾りがついている (図12)。このピラミッドは儀式を行う神殿であり、儀礼の場を象徴する印として、花模様を表したものと、筆者は捉えている。

ジャガーを神格化していたオルメカの影響からか、ジャガーをモチーフにしたマスクが多い。ヘルメットをかぶったような頭や誇張した濃い眉毛も、オルメカの彫刻と共通に見られる要素であり、エル・ミラドールやセロス (図7)、ワシャクトゥン (図12) のマスクなどにも見られる。自然界の強者であるジャガーが神聖視されたことは、何ら不思議なことではない。自然界で脅威の存在であった蛇も神格化されていたことは確実で、ワシャクトゥンのマスクは、蛇の舌と思われるものが表現されている (図11)。このマスクは「天空の蛇」を表したものだとして解釈されており (Coe 2011: 78)、ジャガーや蛇がメソアメリカ全体で神格化されていたことは、これまでの図像研究からも明らかである (Miller 2001, Miller and Taube 1993, Schele and Friedel 1990)。

本論で見てきた石彫マスクの目はくぼんだものが多く、エル・ミラドールのティグレピラミッドの建造物34にある東のマスクは、セロスの建造物5C第2層のもの (図7) と類似しているという (Hansen 1990)。セロスのやや角ばっている目の形は、ワシャクトゥンの建造物E-VII下層のマスクの目と同じである (図11・12)。このようなくぼんだ目は、先古典期後期にある程度共通した表現だと考えてよいだろう。

民族例に目を転じると、シナカンタンで今日も行われている儀礼では、花と香炉、音楽が超自然的なものとなげげるために使われている (Vogt 1969: 403)。また図像学的観点では、古典期に入

ると花と山は密接に結びついているものが多いになっていくことが指摘されている (Taube 2004)。

エル・ミラドールのティグレピラミッド (建造物34) について、前述したように、ハンセンは東のマスクが死を表す地下界から昇る太陽を、西のマスクが生を意味する地上の太陽を象徴していると考えている (Hansen 1990: 164-166)。しかし、太陽の運行を表現するなら、「死」は西と、「生」は東と結びつくはずである。よって、この場合は太陽ではなく金星の動きを表現したと筆者は考える。すなわち、金星は太陽が西に沈んだ後「宵の明星」として西空に輝き、「明けの明星」は太陽が東から昇る前に東空に輝いていることから、金星が太陽に代わって西で活力を得て、東で太陽に輝きを渡す様子を表現した可能性があるだろう。

筆者のこのような考え方は、セロスの建造物5C第2層のマスクとも矛盾しない。太陽が沈むとそれを追うように夜空に出てくるのが金星の宵の明星で、明けの明星が見えた後にやがて太陽が昇ってくることから、左上のマスクが宵の明星を、右上のマスクが明けの明星を表している、シーリーやフリーデルも解釈しているからである (Schele and Friedel 1990: 113)。

このように考えると、石彫マスクを施した建造物全体を天体の運行と同一視していたことになる。太陽や金星は古代マヤ人にとって重要な役割を果たしていたことは周知のことであり、建造物すなわち神殿に聖なる力を宿らせる役割を、石彫マスクが担っていたという説も成り立つであろう。

このような天体の運行を暗喩することも含め、建造物に刻まれた石彫マスクは、神話の場面を取り入れたり、神格化した動物を表現したりすることで、儀式を司る王やエリートはカリスマ性を高め、神殿そのものを権威づける役割を果たしていたと考えられる。

5. 数字と建造物の構造

次に、古代マヤでは特別視されている数字があ

り、その数字が建造物の構造や配置に反映されている事例を見ながら、筆者の考えを述べたい。

「3」は、主要な建造物と他の2つの建造物で構成される「3つ組」と呼ばれる配置パターンに象徴される。フリーデルによると、これは家の中心を世界に見立てて表現したものであり、先古典期後期の建造物の配置に多く見られる (Friedel 1993: 140)。「3つ組」に限らず、先古典期後期の建造物は、ナクベの主要な神殿ピラミッドが3つ建設されているのをはじめ、他の遺跡でも基壇の上に3つのピラミッドが配置されることが多い。しかも、ワシャクトゥンのHグループのように大きな基壇の上にさらに3つの基壇を建設する例 (図8) も目立つことは、この「3」を基本とした建造物の配置が先古典期後期に流行したことを示唆している。ピラミッドの配置のほか、エル・ミラドールのダントピラミッド第3基壇のように3層建築になっていること、マスクもそれに合わせて3対に配列されていること、彫刻の鉤爪が3本であることなど、「3」という数字を意識していたことは明白であろう。また、本論では扱わなかったが、ラマナイの建造物N9-56 (通称仮面の神殿) も3層のピラミッドである (Pendergast 1981)。3つの組み合わせと考えられるT形の基壇は、エル・ミラドール、ナクベ、ワシャクトゥンにも認められる (Hansen 1990: 171)。先古典期ではないものの、古典期のパレンケに認められるG-1・G-2・G-3という3人の神が、「3」と関連しているという説もある (Schele 1979)。また、ハンセンによると、マヤの神々は天界・太陽・地上の要素があり、それはその後の神話にも見られるという (Hansen 1990: 170)。

「4」は、前述したとおり世界を構成する四方位、そして世界の四隅などとの関連を指摘できる数字である。エル・ミラドールのティグレピラミッドの主神殿は4層構造で、マスクは階段脇にそれぞれ4つずつ配置されている。ワシャクトゥンの建造物E-7も、東側を除けば階段の両脇に2つずつ、つまり西・北・南面にマスクがそれぞれ4つずつ装飾されている。地上において、4つの

隅で天空を支えているパウアトゥンとも関連があるかもしれない。また、太陽を示すキンという文字は四葉形をしているものが多く(図7), その形状から「4」は太陽と関係がある可能性も指摘できる。

「9」という数字は、地下界の層数を表している。エル・ミラドールの建造物2A6-6や神殿34の階段は9段であり、これは地下界の層数を表す9と一致する。神殿34の階段を細かく見ると、最初の踊り場まで4段、そして頂上の入口まで9段となっている。古代マヤ人にとって、地下界の存在はとても重要な意味を持っていた。地下界はシバルバーと呼ばれ、『ポボル・ウフ』でも双子の英雄が訪れた場所であり、シバルバーに通じる唯一の道が洞窟だと考えられていた。まだ先古典期後期の建造物には表現されないが、やがて古典期になると多くの建造物が洞窟を入口に見立てた神殿を作るようになる(多々良 2011)。

「13」は天界の層数を表す数字である。13段の階段がある神殿は、ナクベの建造物1, セロスの建造物29Cなどで認められる。また、前述したエル・ミラドールの神殿34の階段も、2段階の階段を合計すると13段となる。この事例も、天空につながるピラミッドを意識したものと考えられる。

以上のように、特定の数字が古代マヤ人に意識されていたことは明らかであろう。これらの数字を神殿の石彫や構造に取り込むことで、王は権威を高めようとしたと考えられる。世界の成り立ちに象徴する聖なる「3」、世界を構成する方位を表す「4」、地下界の層数を表す「9」、天界の層数を表す「13」は、『ポボル・ウフ』などの史料でも多く見られ、このことは古代マヤ人が特定の数字を強く意識していた裏づけにもなるであろう。

6. まとめ

先古典期後期において、マヤ低地南部では巨大なピラミッドが造られ、儀式のための神殿が建てられた。「3つ組」の配置パターンが多用され、神殿基壇には中央階段が設けられ、その両脇には

マスクが飾られた。そのマスクの意味するものはすべての都市で同じわけではないが、ジャガーや鳥などの神を表したものの、神話の場面を再現したもの、太陽や金星などの天体の運行などを表現したものだと考えられる。サン・バルトロのラス・ベントナス神殿第2層からは、ワシャクトウンのE-7下層の構造に類似した漆喰マスクが出土しており(Saturno et al. 1994)、今後も先古典期後期に流行した同様の神殿が発見される可能性が高い。

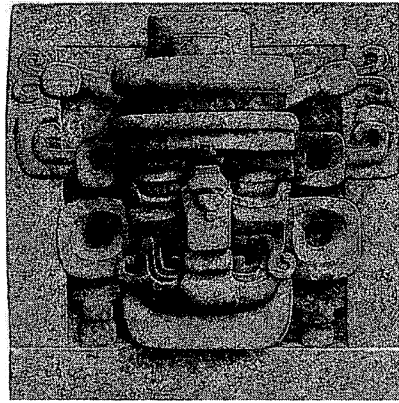
先古典期後期には、すでに方位を意識してピラミッドを建設したこともうかがえるが、この時代全体として同じ傾向があるわけではなく、各都市によって異なっている。例えば、エル・ミラドールのティグレピラミッド主神殿、ワシャクトウンの建造物E-7下層は、正面が東側を向いている。太陽の日の出の方角と一致し、太陽が高い位置にくると、神殿を照らす形になる。また、ワシャクトウンの建造物H-10にあるもっとも大きい神殿は基壇の東側に建てられている。ただし、他の小さな神殿は南北軸に沿って作られている。さらに、セロスの建造物5Cは南側を向いている。この建造物は太陽そして金星の動きを意識して建設されたと推測されているが、神殿そのものは東向きにはなっていない。太陽の方角を意識して建設した可能性は指摘できるが、一定の流行があったとまでは言えないだろう。

さて、本論で扱った先古典期後期の石彫マスクの様式が、その後の古典期に継続、あるいは影響を及ぼしたと考えられる事例も発見されている。本論で見てきたくぼんだ目や四角で丸みのある耳飾りは、古典期前期のティカルの北アクロポリスにある神殿33第2層や第3層のマスクのものと類似している(図14a, b)。マスクのみならず、5世紀(古典期前期)にシヤフ・チャン・カウイール2世(「嵐の空」王)が建てたティカルの神殿33第2層の構造は、先古典期後期の伝統を継ぐものだという(Schele and Friedel 1990: 169)。また、彼が建てさせた石碑31Iに見られる像は、明らかに古い様式の模倣であるという(Martin and



図14 a: ティカル神殿33第2層のマスク

(Coe 1990: FIG.182a, FIG.183a)



b: ティカル神殿33第3層のマスク

Grube 2000: 47-49)。そうだとすれば、この神殿に見られる一連のマスクは、古典期前期のものであっても、十分に先古典期後期におけるマスクを分析するだけの資料となり得る。したがって、先古典期後期の様式を汲んでいる古典期前期の建造物を見つけていくことも、今後重要な課題となるだろう。

また、山をモチーフにした石彫として、ワシヤクトゥンの建造物H-10は聖なる生きた山（ウィッツ）を表しているという説（Schele and Friedel 1990: 136-137）も、本論で取り上げた。本論でその解釈について議論することは避けるが、古典期後期になると山に関連した彫刻が増えることは事実である。例えばユカタン半島に位置するウシュマル遺跡では、尼僧院の北側の建造物に見られるマスクについている花を表象した耳飾り（図15）を、「イツ（its）」のサインだと考えている（Freidel, Schele, and Parker 1993: 412）。この解釈が正しければ、文字の発音が同じことから山を意味する「ウィッツ（wits）」を表している可



図15 「its」と考えられる花模様 (Schele 1998: Fig.3c)

能性も指摘できる。

この例のように、彫刻や壁画の解釈には文字解読も重要である。本論で紹介したキンとヤシュという文字は、太陽の運行に関係があるという説を後押ししている。コバンの建造物10L-22の四隅にある「長いカギ鼻のマスク」が山の怪物「ウィッツ」だと解釈されている理由も、マヤ文字の解読によるものである（Stuart 1987; Fash 1991; 多々良 2011）。ただし、この文字が他の読みであると主張する研究者もあり（八杉による私信 2012）、ここでは学説を紹介しておくにとどめたい。

本論では、古代マヤ人の世界観を考える際、石彫マスクを中心とした図像分析や建造物の構造が有用なアプローチであることを確認できた。そして、神話の内容がその一助になることも述べた。しかし、建造物に見られる図像データが十分とは言えず、図像分析の理論と手法も考えていかなければならない。また、古代マヤ人にはアニミズムがあったことは周知の事実であるが、雨や稲妻など畏怖の対象となるような自然物が石彫に反映されていたことにはあまり言及できなかった。その図像分析については、別稿に委ねたい。

謝辞

本論の執筆に際し、多くの方のご助言をいただ

いた。特に直接指導してくださった藤井純夫先生と中村誠一先生、写真や情報を提供していただいた大木邦夫氏、そして社会人入学を薦め研究活動を後押ししてくださった故久能隆博東北学院榴ヶ岡高等学校前校長に、この紙面をお借りしてあらためて感謝申し上げたい。

参照文献

Coe, Michael D.

1973 *The Maya Scribes and his World*. The Grolier Club, New York.

1989 The Hero Twins: Myth and Image. *The Vase Book*: A Corpus of Rollout Photographs of Maya Vases, Vol.1, by Justin Kerr, pp.161-184. New York: Kerr and Associates.

2011 *The Maya*, 8th edition. Thames and Hudson, New York.

Coe, William R.

1965 Tikal, Guatemala, and Emergent Maya Civilization. *Science* 147: 1401-19.

1990 Excavations in the Great Plaza, North Terrace and North Acropolis of Tikal. Tikal Report No.14 Volume V. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Copeland, Denise Ranae Evans

1989 Excavations in the Monos Complex at El Mirador, Peten, Guatemala. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.61. Brigham Young University, Provo, Utah.

Fash, William L.

1991 *Scribes, warriors, and kings*: the city of Copan and the ancient Maya. Thames and Hudson, New York.

Friedel, David A.

1981 Civilization as a State of Mind: The Cultural Evolution of the Lowland Maya. *The Transition to Statehood in the New World*, edited by Grant D. Jones and Robert R. Kautz, pp.188-248. Cambridge University Press.

1993 Centering the World. *Maya Cosmos*, edited by David Friedel, Linda Schele, and Joy Parker, pp.123-172. Quill William Morrow,

New York.

Friedel, David, Linda Schele, and Joy Parker (editors)

1993 *Maya Cosmos: Three Thousand Years on the Shaman's Path*. Quill William Morrow, New York.

Hansen, Richard D.

1984 *Excavations on Structure 34 and the Tigre Area, El Mirador, Peten, Guatemala*: A New Look at the Preclassic Lowland Maya. A master's thesis, Department of Anthropology, Brigham Young University.

1990 Excavations in the Tigre Complex, El Mirador, Peten, Guatemala, Part 3. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.62. Brigham Young University, Provo, Utah.

1991 The Maya rediscovered: the Road to Nakbe. *Natural History*, May 1991: 8-14. New York.

Howell, Wayne K.

1989 Excavations in the Danta Complex at El Mirador, Peten, Guatemala. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.60. Brigham Young University, Provo, Utah.

Martin, Simon and Grube Nikolai

2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens*. Thames and Hudson. London and New York.

Miller, Mary Ellen

2001 *The Art of Mesoamerica from Olmec to Aztec*, 3rd edition. Thames and Hudson, London.

Miller, Mary Ellen and Karl Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson, London.

Norman, V. Garth

1973 *Izapa Sculpture, Part I: Album*. Papers of the New World Archaeological Foundation, No. 30(1). Brigham Young University, Provo.

1976 *Izapa Sculpture, Part II. Text*. Paper of the New World Archaeological Foundation, No. 30(2). Brigham Young University, Provo.

Pendergast, David M.

1981 Lamanai, Belize: Summary of Excavation Results 1987-1980. *Journal of Field Archaeology* 8(1): 29-53.

Pool, Christopher

2007 Olmec Archaeology and Early Mesoamerica,

Cambridge University Press.

Recinos, Adrián

1952 *Popol Vuh*, Las antiguas historias del Quiché.

Fondo de Cultura Económica, México.

(1977 『ポ波尔・ウフ』 林屋永吉訳, 中央公論社)

Ricketson, Oliver G. and Edith B. Ricketson

1937 *Uaxactun, Guatemala: Group E 1926-1931*.

Carnegie Institution of Washington, Pub.477.

Washington D.C.

Saturno, W. A., David Stuart and Karl Taube

2004 Identification of the West Wall Figures at

Pinturas Sub-1, San Bartolo, Petén, *XVIII*

Simposio de Investigaciones Arqueológicas en

Guatemala, edited by Juan Pedro de la Porte,

Bárbara Arroyo and Héctor E. Mejía. Museo

Nacional de Arqueología e Etnología. Guatemala.

Schele, Linda

1979 Genealogical Documentation in the Tri-

Figure Panels at Palenque. *Tercela Mesa Redonda*

de Palenque, Vol.IV, edited by Merle Greene

Robertson, pp.41-70. Palenque: Pre-Columbian

Art Research, and Monterey: Herald Printers.

1998 The Iconography of Maya Architectural

Facades during the Late Classic Period.

Function and Meaning in Classic Maya

Architecture, edited by Stephen D. Houston, pp.

479-517. Dumbarton Oaks, Washington D.C.

Schele, Linda and David Freidel

1990 *A Forest of Kings, The Untold Story of the*

Ancient Maya. Quill William Morrow, New York.

Schele, Linda and Peter Mathews

1998 *The Code of Kings* : the language of seven

sacred Maya temples and tombs. Scribner,

New York

Stone, Andrea J.

1995 *Images from the Underworld*. University of

Texas Press, Austin.

Stuart, David

1987 Ten Phonetic Syllables. *Research Reports on*

Ancient Maya Writing No.14. Center for Maya

Research, Washington, D.C.

Taube, Karl A.

1992 The Major Gods of Ancient Yucatan. *Studies*

in Pre-columbian Art and Archaeology, No.32,

Dumbarton Oaks, Washington D.C.

2004 Flower Mountain: Concepts of Life, Beauty,
and Paradise among the Classic Maya.

Anthropology and Aesthetics, Res 45.

猪俣 健・中村誠一・馬場悠男 監修

2003 『神秘の王朝—マヤ文明展』 TBS。

多々良 穰

2002 「マヤ文明の精神文化解明に向けての一考察—

文書史料と考古資料・民族誌による総合分析の有

用性」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第9号65

-78頁

2011 「マヤ北部低地における『長い鉤鼻のついたモ

ザイク石彫』の解釈」『考古学と陶磁史学』佐々

木達夫先生退職記念論文集, 182-199頁。金沢大

学考古学研究室。